

[シンポジウム]

## 家族を継続的に支える看護の役割

——各領域の実践から——

### 司会の言葉

千葉大学看護学部

鈴木 和子

東京大学医学部

石垣 和子

#### シンポジウムの趣旨

わが国では高齢化を機に、施設からの在宅ケアや地域ケアの拡大など家族を支える保健医療サービスの内容が多様化してきている。しかし、健康問題を抱える家族にとっては、従来からの施設ケアも、また在宅ケア、地域ケアもいずれもなくってはならないものであり、それらの多様なサービスの中から、家族は時期に応じて最も自分達に適したサービスを選択し、また、状況が変化すればケアの種類を変更したりして健康問題を乗り切っていかなければならない。

このため、例えば、施設ケアと在宅ケアの間のいわゆる移行期における家族の不安は大きく、これらのケアの継続性に対する家族のニーズは高まっている。また、地域ケアでは、家族は地域の様々なサービスに支えられているので、これらをコーディネートする看護職の役割が重要になってきている。

看護の継続性、いわゆる継続看護の重要性については、すでに1969年のICNの東京大会で論議されたという歴史の長いテーマであるが、今、在宅ケアや地域ケアが施設ケアと並んで重要視されるようになり、再びクローズアップされてきたと考える。そこで、今回は、特に各領域ですでに試みられている家族に対する継続的な看護実践を紹介していただき、

その活動から家族看護の果たす役割について討議したい。

#### シンポジストの紹介

1. 高齢者介護をめぐる家族、地域社会、自治体  
—社会福祉の立場から—

村川 浩一（日本社会事業大学研究所助教授）

福祉の立場から、最近の高齢者介護をめぐる家族や社会の変化、また制度の新しい動きについて最新の動向をお話していただき、そのような変化に伴って看護職に期待する点についても、ご意見をいただけることを期待している。

2. 医療施設における家族への継続的な支援  
—Werdnig-Hoffman氏病児の行動範囲拡大への試みを通して—

増田千鶴子（昭和大学附属病院小児科病棟婦長）

施設内の病棟から重症小児疾患児を抱える家族への発達に応じた継続的なケアを試みられ、そのケースから学んだ継続的な家族支援のあり方についてお話していただく。

3. 家族を継続的に支える家族看護の役割

—病院保健婦の立場から—

岡部 明子（川崎市立井田病院

保健医療部主任保健婦）

12年間、在宅医療事業に従事されてきた豊富なご

経験から施設内の訪問看護部門からの継続的な家族ケアについて、事例を交えながらお話していただく。

#### 4. ホスピスにおける遺族ケアとは

黒川 紀子（聖ヨハネ会桜町病院ホスピス婦長）

ホスピスでの一貫した家族に対するケア、とくに患者さんが亡くなられた後も継続して遺族のケアを試みていらっしゃるご経験から、実践的な家族ケアの内容をご紹介します。

#### 5. 地域看護と家族

石井 享子（国立公衆衛生院保健指導室長）

地域看護学の大学教育に7年間従事されて、今年の4月より現職に就かれ、保健婦の継続教育に当たられているご経験から、地域側からの総合的な視点で、コーディネートなどを含む家族への継続的な援助の基本的な考え方や地域ケアシステムにおける看護の役割についてご発言をいただく。

---

### まとめの言葉

各領域での貴重な体験的実践活動や将来に向けての継続的な家族ケアの課題についてご発表をいただいた後、会場の皆様からも活発な討議がなされ、大変、有意義なシンポジウムになったと思う。

はじめにも述べたとおり、施設ケア、在宅ケア、地域ケアは、どれも家族にとって必要なものであるが、それらの多様なケアを繋ぐための継続的な看護があってはじめて、家族にとってケアの一つ一つが価値のあるものになるということを皆で確認できたと考える。

今後は、これらの継続的な家族ケアにおいて、看

護職が独自の役割を果たしていかなければならない。そのためにも、すでに始められている各領域での家族ケアを互いに共有することが、家族看護をすすめていく上で大事である。そういう意味で、本シンポジウムでは、各領域からの実践の報告を受けて、互いに他領域の活動を理解する機会となり、それをもとに継続的な家族看護の役割についてテーマを深められと思う。

また、本シンポジウムが参加された皆様にとって、自分の実践活動を振り返る機会となり、今後に向けてさらに前進する動機を得られたら幸いである。